

岡山県小売業の構造変化

— 岡山市を中心として —

財団法人 岡山経済研究所

研究員 小川 雄三

I. はじめに

今回の景気低迷時において特徴的であったことの1つに個人消費の極度の不振があげられる。その原因としては、もう買うものがなくなったとする消費飽和説、消費者のニーズの変化に供給側の企業が対応しきれていないとする需給ミスマッチ説、キャピタル・ゲインが全く得られなくなったためとする逆資産効果説、さらにはバブル期に商品を購入しすぎた反省等々、実に多彩であったが、消費者のニーズ、購買行動が変化しているのは明らかであり、小売業がその変化に対応していない部分があることは確かであろう。

ここでは、2年おきに実施している『商業統計』(通商産業大臣官房調査統計部編)調査を利用し、販売サイドから小売業の構造変化を概観してみることにしたい。

II. 岡山県小売業の状況

構造変化をみる前に、岡山県小売業の全国における位置を確認しておきたい。平成3年において岡山県の小売業商店数は26,460店、従業者数109,178人、年間商品販売額(以下、販売額と略す)2兆221億円となっている。これは全国シェアのそれぞれ1.66%、1.57%、1.44%を占める。商店数に比べ販売額シェアが低くなっている。

最近の推移をみると表1のようになっている。岡山県小売業は昭和63年から平成3年において販売額の伸びが全国を大きく下回っていることに代表されるように、全国に比べやや伸び悩み状態にあると言えよう。

III. 規模別変化

『商業統計』調査を使い捉えられる構造変化の主なものとして①規模の変化、②業種の変化、③立地の変化——があげられよう。

平成3年における岡山県小売業商店数26,460店を規模別にみると(表2)、従業者1~

表1 小売業の推移

(単位：店、人、億円、%)

| | 岡山県 | | | 全 国 | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| | 昭 60 | 昭 63 | 平 3 | 昭 60 | 昭 63 | 平 3 |
| 商店数 (同伸び率) | 26,925 (▲5.0) | 26,804 (▲0.4) | 26,460 (▲1.3) | 1,628,644 (▲5.4) | 1,619,752 (▲0.5) | 1,591,223 (▲1.8) |
| 従業者数 (同伸び率) | 102,130 (0.0) | 108,110 (5.9) | 109,178 (1.0) | 6,328,614 (▲0.6) | 6,851,335 (8.3) | 6,936,526 (1.2) |
| 年間商品販売額 (同伸び率) | 15,557 (8.4) | 17,483 (12.4) | 20,221 (15.7) | 1,017,188 (8.2) | 1,148,400 (12.9) | 1,406,381 (22.5) |

資料：通産省「商業統計表」

表2 規模別小売商店数の推移

(単位：店、%)

| | 岡山県 | | | 全 国 | | |
|--------|---------------|---------------|---------------|------------------|------------------|------------------|
| | 昭 60 | 昭 63 | 平 3 | 昭 60 | 昭 63 | 平 3 |
| 1～4人 | 22,248 (82.6) | 21,540 (80.4) | 21,142 (79.9) | 1,348,201 (82.8) | 1,296,444 (80.0) | 1,264,125 (79.4) |
| 5～9人 | 3,243 (12.0) | 3,568 (13.3) | 3,623 (13.7) | 190,434 (11.7) | 214,046 (13.2) | 214,007 (13.4) |
| 10～19人 | 918 (3.4) | 1,092 (4.1) | 1,088 (4.1) | 57,911 (3.6) | 70,394 (4.3) | 71,905 (4.5) |
| 20～29人 | 249 (0.9) | 288 (1.1) | 286 (1.1) | 15,340 (0.9) | 19,186 (1.2) | 20,202 (1.3) |
| 30～49人 | 170 (0.6) | 216 (0.8) | 201 (0.8) | 10,035 (0.6) | 12,250 (0.8) | 12,850 (0.8) |
| 50～99人 | 70 (0.3) | 71 (0.3) | 88 (0.3) | 4,764 (0.3) | 5,362 (0.3) | 5,851 (0.4) |
| 100人以上 | 27 (0.1) | 29 (0.1) | 32 (0.1) | 1,959 (0.1) | 2,070 (0.1) | 2,283 (0.1) |
| 法人商店 | 8,186 (30.4) | 9,036 (33.7) | 9,984 (37.7) | 449,309 (27.6) | 503,728 (31.1) | 564,642 (35.5) |
| 個人商店 | 18,739 (69.6) | 17,768 (66.3) | 16,476 (62.3) | 1,179,335 (72.4) | 1,116,024 (68.9) | 1,026,581 (64.5) |

資料：通産省「商業統計表」

注：()は構成比

4人規模の小売店は21,142店、構成比79.9%となっている。県内小売店のうち8割が従業者4人以下の零細店ということである。1～4人規模の小売店数は、前回昭和63年調査では21,540店であったので、この間398店の減少である。また60年から63年においては708店の減少となっている。さらに遡れば、岡山県小売店数は全国的傾向と同様昭和57年調査においてピークを記録したが、この年1～4人規模店は23,708店であった。つまり、1～4人規模店は9年間で2,566店も減少したことになる。ただし、この中には5～9人規模、さらにはそれ以上の規模に成長した小売店もあろうから、減少数が全て廃業したことを意味するものではない。それは5～9人規模店が昭和60年から63年において325店、63年から平成3年において55店増加していることからもうかがえるが、その数は少ないため、大部分は廃業の道を辿ったものと考えられる。(ただし、この間、新規参入も多数

あつたであろうから、2,566店以上の廃業があつたことも十分考えられる。)

小規模店の減少は経営組織面からもうかがわれる。つまり、個人商店は昭和60年から63年において971店、63年から平成3年において1,292店の減少である。これに対し法人商店は、この間850店、948店の増加となっているのである。

こうした動向から岡山県小売業の平均規模は着実に拡大している。具体的にみると(表3)、昭和60年から平成3年までの6年間で、1店舗あたり従業者は3.8人から4.1人へと0.3人の増加、同様に1店舗あたり販売額は5,778万円から7,642万円と32%、従業者1人あたり販売額は1,523万円から1,852万円へと22%の各増加である。また1店舗あたりの売場面積は62.9m²から76.1m²と13.2m²、率にして21%の増加となっている。

従業者規模別の1商店あたり販売額、従業者1人あたり販売額をみたのが表4、表5である。これをみると当然のことながら、販売効率は規模の大きい商店が大幅に向上升している。しかし、昭和60年から平成3年における従業者100人以上規模店の従業者1人あたり販売額の年平均伸び率は1.0%増と低い伸びに止まっているほか、1商店あたり販売額の年平均伸び率にいたっては0.1%減と減少しているのである。大規模店の停滞ぶりがうかがわれる。

表3 販売効率の推移

| | 岡 山 県 | | | 全 国 | | |
|-----------------------------|-------|-------|-----------|-------|-------|-----------|
| | 昭 60 | 平 3 | 年平均伸び率(%) | 昭 60 | 平 3 | 年平均伸び率(%) |
| 1店舗あたり従業員(人) | 3.8 | 4.1 | 1.3 | 3.9 | 4.4 | 2.0 |
| 1店舗あたり販売額(万円) | 5,778 | 7,642 | 4.8 | 6,246 | 8,838 | 6.0 |
| 従業者1人あたり販売額(万円) | 1,523 | 1,852 | 3.3 | 1,607 | 2,028 | 4.0 |
| 1店舗あたり売場面積(m ²) | 62.9 | 76.1 | 3.2 | 58.0 | 69.1 | 3.0 |
| 1m ² あたり販売額(万円) | 92 | 100 | 1.4 | 108 | 128 | 2.9 |

資料：通産省「商業統計表」

表4 従業者規模別 1商店あたり販売額

(単位：万円、%)

| | 岡山県 | | | 全 国 | | |
|--------|---------|---------|--------|---------|---------|--------|
| | 昭 60 | 平 3 | 年平均伸び率 | 昭 60 | 平 3 | 年平均伸び率 |
| 1～4人 | 2,366 | 2,914 | 3.5 | 2,351 | 3,024 | 4.3 |
| 5～9人 | 11,167 | 12,536 | 1.9 | 11,527 | 13,494 | 2.7 |
| 10～19人 | 23,265 | 27,796 | 3.0 | 23,647 | 29,773 | 3.9 |
| 20～29人 | 39,984 | 50,926 | 4.1 | 42,334 | 52,831 | 3.8 |
| 30～49人 | 54,555 | 73,615 | 5.1 | 68,837 | 81,540 | 2.9 |
| 50～99人 | 85,004 | 134,095 | 7.9 | 128,847 | 157,521 | 3.4 |
| 100人以上 | 747,137 | 742,940 | ▲0.1 | 757,078 | 952,869 | 3.9 |

資料：通産省「商業統計表」

表5 従業者規模別 従業者1人あたり販売額

(単位：万円、%)

| | 岡山県 | | | 全 国 | | |
|--------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|
| | 昭 60 | 平 3 | 年平均伸び率 | 昭 60 | 平 3 | 年平均伸び率 |
| 1～4人 | 1,104 | 1,332 | 3.2 | 1,095 | 1,372 | 3.8 |
| 5～9人 | 1,807 | 2,007 | 1.8 | 1,859 | 2,160 | 2.5 |
| 10～19人 | 1,796 | 2,152 | 3.1 | 1,806 | 2,258 | 3.8 |
| 20～29人 | 1,676 | 2,151 | 4.2 | 1,797 | 2,237 | 3.7 |
| 30～49人 | 1,436 | 1,989 | 5.6 | 1,847 | 2,186 | 2.8 |
| 50～99人 | 1,324 | 2,036 | 7.4 | 1,964 | 2,401 | 3.4 |
| 100人以上 | 3,600 | 3,820 | 1.0 | 3,322 | 4,141 | 3.7 |

資料：通産省「商業統計表」

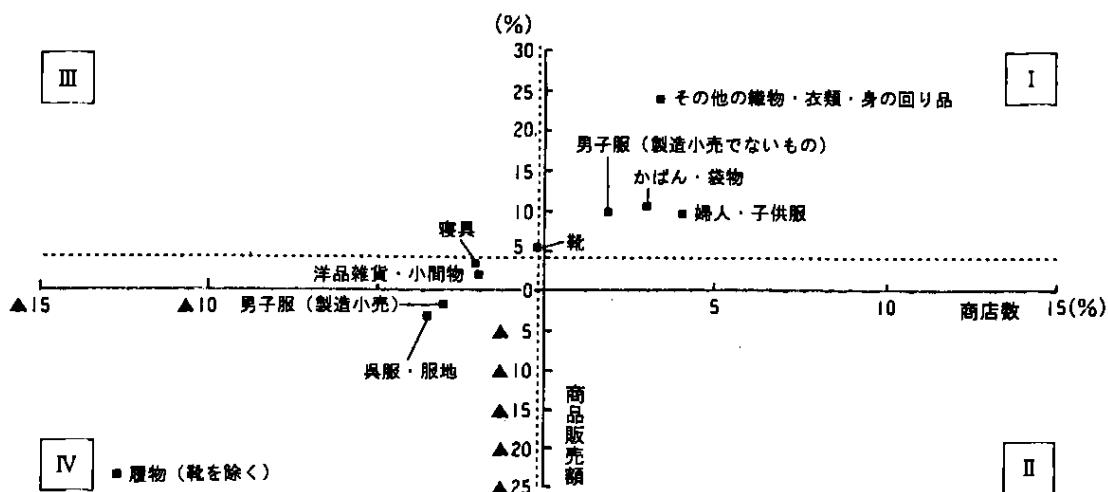
以上のように、岡山県小売業界では零細規模店の減少、規模の拡大という変化が進行している。ただし、規模の拡大とは言うものの、従業者10人以下の小売店構成比は、岡山県は全国より1ポイント高い。また、岡山県の従業者1人あたり販売額、1商店あたり販売額とも全国より低位にあり、岡山県小売店の規模は全国レベルに比べやや下回っているのが現状であろう。

IV. 業種別変化

次に岡山県小売業の構造変化を業種の面から捉えてみたい。

岡山県小売業を衣関連小売業、食関連小売業、住関連小売業、その他の小売業の4つに大別し、細分類業種の商店数と販売額について、昭和60年から平成3年の6年間の年

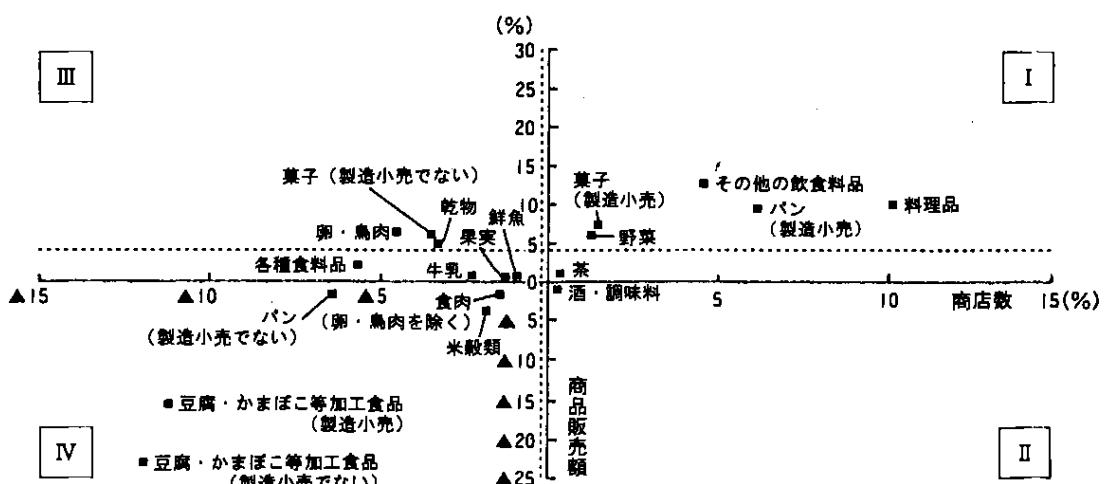
図1 衣関連小売業



資料：岡山県「商業統計調査結果表」

注：昭和60年から平成3年における年平均伸び率
破線は県全体の年平均伸び率

図2 食関連小売業

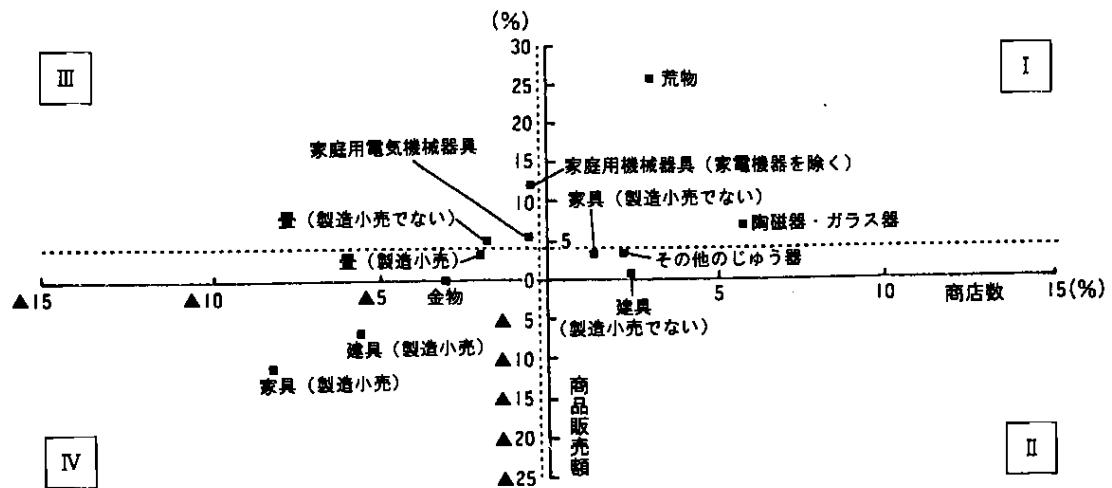


資料：岡山県「商業統計調査結果表」

注：昭和60年から平成3年における年平均伸び率
破線は県全体の年平均伸び率

平均伸び率を示したのが図1～図4である。図中の破線は岡山県全体の商店数、販売額の年平均伸び率である。この破線により4グループに区分できる。商店数、販売額とともに県平均を上回るIグループは「成長業種」と言えるであろう。これに対し、ともに県

図3 住関連小売業

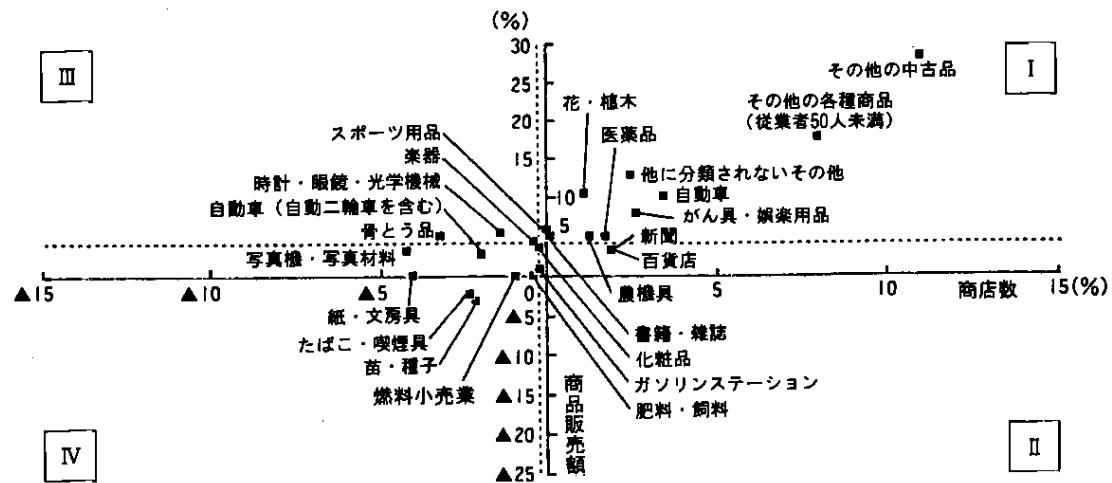


資料：岡山県「商業統計調査結果表」

注：昭和60年から平成3年における年平均伸び率

破線は県全体の年平均伸び率

図4 その他の関連小売業



資料：岡山県「商業統計調査結果表」

注：昭和60年から平成3年における年平均伸び率

破線は県全体の年平均伸び率

平均を下回るIVグループは残念ながら「衰退業種」と呼ばざるを得ないであろう。ただし、言うまでもないが、これは昭和60年から平成3年についてであり、将来にわたってそうであるということではない。

① 衣関連小売業

昭和60年から平成3年における衣関連小売業全体の商店数の年平均伸び率は0.1%増、販売額は5.3%増である。この間、県全体では0.3%減、4.5%増であるため、衣関連全体としてみると辛うじて成長業種に区分できる。

業種別にみると、婦人・子供服小売業、かばん・袋物小売業、その他の織物・衣類・身の回り品小売業などが商店数、販売額とも高い伸びとなっている。これに対し、履物小売業（靴を除く）はともに大幅減少している。また男子服小売業は、仕立等の製造小売が商店数、販売額とも減少しているのに対し、製造小売でないものはともに増加、特に販売額は1割近い伸びとなっており、対照的な結果である。

② 食関連小売業

食関連は全体では店舗数0.9%減、販売額2.9%増となっており、県平均の伸び率を下回っている。これは店舗数が減少した業種が多くあったためである。こうした中にあって料理品小売業は商店数10.2%増、販売額10.3%増とともに2桁の伸びとなった。これは女性の社会進出や単身世帯の増加などにより調理済の総菜、弁当類等の需要が増加したためである。また、その他の飲食料品小売業も商店数4.6%増、販売額12.8%増と高い伸びとなっている。

パン小売業については、焼きたて・新鮮さを武器に製造小売が商店数6.2%増、販売額9.7%増と成長しているのに対し、製造小売でないものは、同6.4%減、1.6%減と低迷しており、対照的な結果となっている。これは前にみた衣関連小売業の男子服において、製造小売でないものが成長、製造小売が低迷しているのとは、正反対の結果である。

③ 住関連小売業

住関連小売業は商店数0.2%減、販売額6.1%増とほぼ県全体と同水準の伸びとなっている。住関連で特徴的なことは、荒物小売業が25.6%増、家庭用機械器具小売業（家電機器を除く）が11.9%増と販売額で高い伸びを記録している点である。これはD I Y店やホームセンターの伸長を表わすものであろう。また、伝統的な単品販売業種と考えられる陶磁器・ガラス器小売業が商店数で5.7%、販売額で6.8%増加していることが注目される。なお、家具小売業、建具小売業については、製造小売は低迷、製造小売でないものは僅かではあるものの増加している。

④ その他の小売業

これまで述べた三業種に分類できないその他の小売業は商店数0.2%増、販売額4.9%増の伸びであった。業種別にみると、その他の中古品小売業が規模は小さいながら商店数10.9%増、販売額28.5%増と高い伸びとなっており、最近のリサイクルの高まりを反

映している。この他、自動車小売業（同3.4%増、10.3%増）、その他の各種商品小売業（従業者50人未満）（同8.0%増、17.9%増）、がん具・娯楽用品小売業（同2.6%増、8.1%増）、花・植木小売業（同1.0%増、10.4%増）、他に分類されないその他の小売業（同2.4%増、12.9%増）などが高い伸びとなっている。

これに対し、苗・種子小売業（同2.2%減、3.3%減）、紙・文具小売業（同4.0%減、0.2%減）、たばこ・喫煙具専門小売業（同2.3%減、2.3%減）はともに減少している。

以上、産業細分類別にその動向を概観したのであるが、次のようにまとめができるであろう。第一に、商店数、販売額ともに高い伸びとなっている業種は、平成景気の波に乗り需要が増大した業種の他に、消費者ニーズの変化に対応できたものや時代の変化に対応した新業態のものである。これは、従来の範ちゅうでは分類できない「その他」の業種が高い伸びとなっている点からもうかがえる。

第2に、反対に商店数、販売額とも低い伸びあるいは減少しているのは、時代変遷の中で需要が減少した業種や新業態との競合から低迷を余儀なくされた単品販売の小売り業種が多くなっている。

換言すれば、女性の社会進出や単身世帯の増加などから、全ての買物が1カ所で可能な商店や、総菜等の調理済み食品販売の商店や、24時間営業のコンビニエンスストア等の利用が高まっているのである。また、休日に自家用車で買物に行き、1週間分の食料品等を購入する購買パターンも多くなっているため、こうした購買行動の変化に合致した業態が成長したといえるであろう。

こうした需要サイドの変化は、供給サイドである商店の立地に変化を及ぼしていることは言うまでもない。

V. 立地の変化

まず、岡山県内10市の小売業変化についてみることにする（表6）。

岡山県内10市の商圏人口の推移をみると

$$\left. \begin{aligned} & \text{岡山市の場合} \\ & \text{岡山市の商圏人口} = \text{岡山市人口} \times \frac{\text{岡山市の商品販売額} \div \text{岡山市人口}}{\text{岡山県の商品販売額} \div \text{岡山県人口}} \end{aligned} \right\}$$

岡山市は昭和60年において70.5万人、63年75.9万人、平成3年78.4万人であり、6年間で10%以上の増加となった（表7）。この間、岡山市の小売商店数は7,558店から7,619店へと61店、0.8%増加している。岡山県内小売商店数が減少する中で僅かの増加というものの減少しなかったことは、岡山市に立地が多数あったことを示すものであろう。

岡山市以外の都市部で商店数が増加したのは高梁市の20店、備前市の6店である。こ

表6 岡山県都市部の小売業の推移

(単位:店、人、百万円、m²、%)

| | 商店数 | | | 従業者数 | | | 年間商品販売額 | | | 売場面積 | | |
|------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|-----------|-----------|--------|-----------|-----------|--------|
| | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 |
| 岡山市 | 7,558 | 7,619 | 0.1 | 33,310 | 37,427 | 2.0 | 573,069 | 819,641 | 6.1 | 532,981 | 674,970 | 4.0 |
| 倉敷市 | 5,502 | 5,492 | ▲0.0 | 22,271 | 24,495 | 1.6 | 359,716 | 464,194 | 4.3 | 388,778 | 468,447 | 3.2 |
| 津山市 | 1,529 | 1,490 | ▲0.4 | 6,240 | 6,623 | 1.0 | 97,142 | 126,073 | 4.4 | 111,062 | 122,000 | 1.6 |
| 玉野市 | 1,099 | 1,037 | ▲1.0 | 3,921 | 3,748 | ▲0.7 | 56,346 | 56,729 | 0.1 | 66,709 | 64,567 | ▲0.5 |
| 笠岡市 | 951 | 908 | ▲0.8 | 3,271 | 3,230 | ▲0.2 | 42,933 | 51,854 | 3.2 | 49,553 | 64,687 | 4.5 |
| 井原市 | 566 | 565 | ▲0.0 | 2,019 | 2,112 | 0.8 | 25,323 | 32,573 | 4.3 | 34,381 | 38,946 | 2.1 |
| 総社市 | 642 | 630 | ▲0.3 | 2,565 | 2,811 | 1.5 | 41,999 | 50,558 | 3.1 | 46,600 | 60,190 | 4.4 |
| 高梁市 | 458 | 478 | 0.7 | 1,462 | 1,682 | 2.4 | 19,716 | 25,989 | 4.7 | 20,872 | 39,059 | 11.0 |
| 新見市 | 539 | 526 | ▲0.4 | 1,829 | 1,914 | 0.8 | 27,774 | 30,454 | 1.5 | 27,494 | 28,318 | 0.5 |
| 備前市 | 611 | 617 | 0.2 | 2,139 | 2,115 | ▲0.2 | 28,447 | 33,882 | 3.0 | 33,366 | 40,805 | 3.4 |
| 岡山県計 | 26,925 | 26,460 | ▲0.3 | 102,130 | 109,178 | 1.1 | 1,555,730 | 2,022,106 | 4.5 | 1,693,129 | 2,013,507 | 2.9 |

資料:岡山県「商業統計調査結果表」

表7 岡山県都市部の販売効率等の推移

(単位:店、人、百万円、m²、%)

| | 商圈人口 (千人) | | | 店舗密度 (店/1,000人) | | | 売場面積密度 (売場面積(m ²)/人口1人あたり) | | |
|------|--------------|-------|--------|--------------------|------|--------|-------------------------------------------|------|--------|
| | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 |
| 岡山市 | 705 | 784 | 1.8 | 13.5 | 13.0 | ▲0.6 | 0.95 | 1.15 | 3.2 |
| 倉敷市 | 443 | 444 | 0.0 | 13.3 | 13.2 | ▲0.1 | 0.94 | 1.12 | 3.0 |
| 津山市 | 119 | 121 | 0.3 | 18.1 | 17.0 | ▲1.0 | 1.31 | 1.39 | 1.0 |
| 玉野市 | 69 | 54 | ▲4.0 | 14.1 | 13.9 | ▲0.2 | 0.85 | 0.86 | 0.2 |
| 笠岡市 | 53 | 50 | ▲1.0 | 15.4 | 15.1 | ▲0.3 | 0.80 | 1.07 | 5.0 |
| 井原市 | 31 | 31 | 0.0 | 15.0 | 15.3 | 0.3 | 0.91 | 1.05 | 2.4 |
| 総社市 | 52 | 48 | ▲1.3 | 12.5 | 11.7 | ▲1.1 | 0.91 | 1.12 | 3.5 |
| 高梁市 | 24 | 25 | 0.7 | 17.2 | 18.8 | 1.5 | 0.79 | 1.53 | 11.6 |
| 新見市 | 34 | 33 | ▲0.5 | 18.9 | 19.3 | 0.3 | 0.97 | 1.04 | 1.2 |
| 備前市 | 35 | 32 | ▲1.5 | 18.7 | 19.5 | 0.7 | 1.02 | 1.29 | 4.0 |
| 岡山県計 | 1,913 | 1,934 | 0.1 | 14.1 | 13.7 | ▲0.5 | 0.88 | 1.04 | 2.8 |

資料:岡山県「商業統計調査結果表」

の間、他の7市は減少している。特に、玉野市(62店)、笠岡市(43店)の減少が顕著であった。ただし注意すべきは、商店数が増加しても直ちに商圈人口が増加するわけではない。例えば、商店数が増加している備前市は商圈人口は減少しているのに対し、商店数が減少している津山市の商圈人口は僅かではあるが増加している。僅かの商店数の増

減は商圈人口の増減には相關しないということであろうが、この点は今後の検討課題である。

次に県内10市の売場面積をみると、昭和60年から平成3年において減少しているのは玉野市のみである。これは昭和60年から63年の間に大幅減少があったためで、63年から平成3年においては3,526m²、5.8%の増加となっている。商店数が減少している7市においても売場面積が増加していることは、前述したように零細規模店が減少し、小売店規模が拡大していることを示すものである。ただここでも、売場面積の増加は商圈人口の増加につながっていない。例えば、昭和60年から平成3年まで売場面積が3割増加している笠岡市は、この間商圈人口は5.7%減少している。同様に、総社市は29.2%の増加に対して7.7%の減少、備前市も22.3%の増加、8.6%の減少であった。

次に売場面積密度（人口1人あたりの売場面積）をみると、平成3年において、岡山県の都市部で1.53m²である。これは平成2年と3年に店舗面積が6,970m²と同一の大型店2店が相次いでオープンしたためであろう。次いで津山市1.39m²、備前市1.29m²である。反対に低いのは、玉野市で0.86m²である。なお、昭和60年に1.31m²でトップであった津山市は、昭和60年から平成3年の間、県内各都市の売場面積密度が2割前後の伸びとなる中で6.1%の低い伸びに止まった。これは売場面積はもう十分広いということを示すものか、津山市小売業の停滞を表すものか興味深いところである。

最後に、人口千人あたり何店の店があるかという店舗密度についてみると、平成3年において岡山県都市部で最も店舗密度が高いのは備前市で19.5店である。反対に最も少ないのは総社市の11.7店である。県下第1位の販売額をもつ岡山市は13.0店で低位に止まっており、かつ昭和60年から平成3年においては減少している。店舗密度が上昇（反対に下降）するには、店舗数が増加（減少）するか、人口が減少（増加）するかであるが、概して、人口集積が高い県南部都市の店舗密度は低く、県中北部都市の店舗密度は高くなっているようである。これのみでは即断はできないが、これは県南部の人口増加に小売商店の新規出店が対応できていないことによるものと考えられる。

以上、多々述べてきたが、岡山県小売業の現状を一口で表現すると、岡山市の集中化傾向が強まっているということである。しかも店舗密度からみて今後もその流れは止まりそうでないとみられるのである。

VI. 岡山市における立地の変化

それでは集中化傾向にある岡山市内部ではどの様な変化が起きているのであろうか。ここでは岡山市における立地変化についてみることにする（表8）。

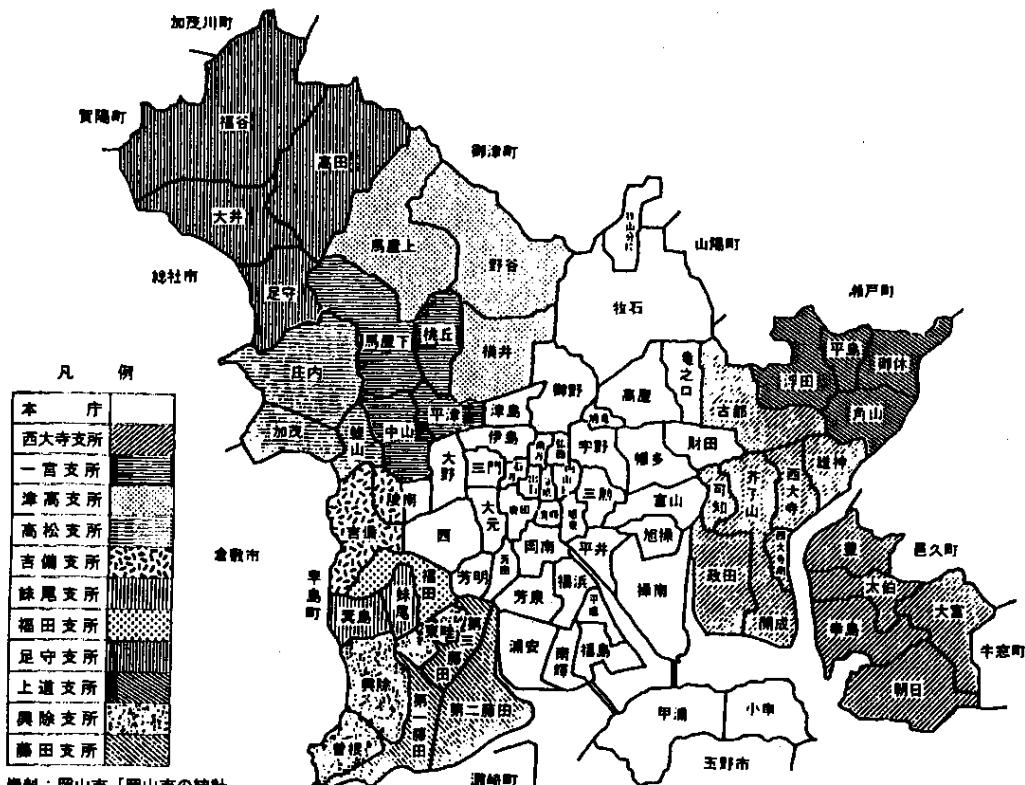
表8 岡山市の本庁、支所別人口、商店数等の推移

(単位：人、店、百万円、%)

| | 人口 | | | 商店数 | | | 従業者数 | | | 年間商品販売額 | | |
|------|---------|---------|--------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|
| | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 |
| 本 庁 | 372,730 | 388,186 | 0.7 | 5,512 | 5,661 | 0.4 | 25,656 | 28,796 | 1.9 | 453,348 | 650,675 | 6.2 |
| 西大寺 | 61,521 | 62,240 | 0.2 | 796 | 706 | ▲2.0 | 2,798 | 2,963 | 1.0 | 41,014 | 51,241 | 3.8 |
| 一 宮 | 19,561 | 21,077 | 1.3 | 133 | 138 | 0.6 | 463 | 571 | 3.6 | 6,688 | 9,699 | 6.4 |
| 津 高 | 14,838 | 15,661 | 0.9 | 86 | 88 | 0.4 | 349 | 524 | 7.0 | 4,809 | 11,520 | 15.7 |
| 高 松 | 15,605 | 15,760 | 0.2 | 163 | 158 | ▲0.5 | 561 | 596 | 1.0 | 7,143 | 10,035 | 5.8 |
| 吉 傳 | 18,378 | 19,716 | 1.2 | 207 | 182 | ▲2.1 | 674 | 863 | 4.2 | 9,725 | 15,992 | 8.6 |
| 妹 尾 | 13,628 | 14,725 | 1.3 | 194 | 181 | ▲1.1 | 740 | 829 | 1.9 | 11,179 | 20,690 | 10.8 |
| 福 田 | 7,874 | 8,913 | 2.1 | 52 | 64 | 3.5 | 258 | 386 | 6.9 | 4,453 | 10,007 | 14.4 |
| 上 道 | 11,244 | 13,641 | 3.3 | 153 | 164 | 1.2 | 646 | 851 | 4.7 | 13,065 | 22,756 | 9.7 |
| 興 除 | 11,127 | 12,057 | 1.3 | 80 | 89 | 1.8 | 292 | 336 | 2.4 | 3,342 | 4,132 | 3.6 |
| 足 守 | 8,754 | 8,388 | ▲0.7 | 108 | 101 | ▲1.1 | 283 | 331 | 2.6 | 3,278 | 4,089 | 3.8 |
| 藤 田 | 11,714 | 12,559 | 1.2 | 74 | 87 | 2.7 | 590 | 381 | ▲7.0 | 15,025 | 8,806 | ▲8.5 |
| 岡山市計 | 566,972 | 592,923 | 0.7 | 7,558 | 7,619 | 0.1 | 33,310 | 37,427 | 2.0 | 573,069 | 819,641 | 6.1 |

資料：岡山市「岡山市の統計」

図5 岡山市の本庁、支所、学区区割図



資料：岡山市「岡山市の統計」

まず平成3年の人口を統計上の関係から本庁（概ね昭和43年までに合併した旧岡山市域を中心とした地域、以下、岡山市域と略す）と西大寺、一宮、津高、高松、吉備、妹尾、福田、上道、興除、足守、藤田の11支所別にみると（図5）、当然のことながら岡山市域が388,186人で、岡山市全体の65%を占め最も多くなっている。昭和60年からの推移をみても、岡山市全体の年平均伸び率0.75%とほぼ同水準の0.68%の伸びとなっており増加傾向にある。（ただし、これは全体の7割近くを占める地域の増減率に、全体の増減率が近似するのは当然の結果といえる。）

次に商店数についてみると、やはり岡山市域が5,661店で、同74.3%を占めている。昭和60年からの年平均伸び率も0.45%であり、岡山市全体の0.13%を大きく上回っている。

販売額はさらに顕著で、岡山市域は6,507億円、同79.4%を占める。年平均伸び率も6.2%と高い伸びである（岡山市全体では6.1%増）。岡山市小売業の販売額の高い伸びは津高地域、妹尾地域、福田地域、上道地域など郊外地域の伸びもあるが、最も大きな要因は、販売額の8割を占める岡山市域の高い伸びによるためである。

それでは、岡山市域のどの地区の販売額が伸びているのであろうか。次にこの点を見るにすることにする。

『商業統計』は商店街別の販売額が公表されていないため、岡山市の81学区別の販売額を利用することにする。岡山市学区別販売額のトップは内山下学区で、平成3年調査では1,030億円である。この規模は、県内第3位の販売額を誇る津山市の約8割、総社市の丁度2倍、高梁市の4倍弱である。これは当学区には表町商店街の大部分が含まれるからであるが、商店数は高梁市とほぼ同数であるので、表町商店街の集客力が如何に巨大であるかがわかる。

第2位の販売額となっているのが出石学区の764億円である。これは当学区に岡山駅前の商業集積地区が含まれていることによる。出石学区の商店数398店は、県内各都市の商店数を下回っているが、販売額では玉野市以下7市の販売額を上回っており、商店の規模の大きさがうかがわれる。

また奉還町商店街が大部分含まれる石井学区は、商店数は462店と内山下学区とほぼ同程度ながら、販売額は294億円となっている。販売額の相違は両商店街の性格の違い、換言すれば顧客ターゲットの相違からくる商圈範囲の広狭によるものと考えられる。なお販売額の294億円は新見市の販売額（305億円）にほぼ匹敵する規模であり、岡山市を代表する商店街の1つと位置づけられるのも当然であろう。

次に岡山市はもとより岡山県を代表するといつても過言でないこれら3商店街の販売額の推移をみることにしたい（表9）。推移をみるにあたり、表町商店街は内山下・深祇学区、岡山駅前商店街は出石学区、奉還町商店街は石井学区と設定した。しかし、これら学区と商店街が完全に一致しないのは言うまでもない。このため各商店街とやや遊離した面があるかもしれない。

表9 岡山市の中心部学区の商店数等の推移

(単位：店、人、百万円、m²)

| | 商 店 数 | | | 従 業 者 数 | | | 年間商品販売額 | | | 売 場 面 積 | | |
|--------|-------|-----|--------|---------|-------|--------|---------|---------|--------|---------|---------|--------|
| | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平3 | 年平均伸び率 |
| 内山下・深柢 | 860 | 837 | ▲0.5 | 4,927 | 4,802 | ▲0.4 | 121,875 | 148,847 | 3.4 | 113,498 | 110,361 | ▲0.5 |
| 出 石 | 355 | 398 | 1.9 | 2,730 | 2,533 | ▲1.2 | 62,603 | 76,375 | 3.4 | 66,361 | 70,978 | 1.1 |
| 石 井 | 513 | 462 | ▲1.7 | 1,938 | 1,679 | ▲2.4 | 27,320 | 29,387 | 1.2 | 32,120 | 25,749 | ▲3.6 |

資料：岡山市「岡山市の統計」

昭和60年において内山下・深柢学区は商店数860店、従業者数4,927人、販売額1,219億円、売場面積113,498m²であった。それが平成3年には837店、4,802人、1,488億円、110,361m²になった。販売額は増加しているものの、商店数、従業者数、売場面積は減少している。また販売額が増加したとはいいうものの、昭和60年から平成3年の6年間における年平均伸び率は3.4%に止まっており、岡山市全体の年平均伸び率は6.1%を大きく下回っている。岡山県第1の販売額を誇る表町商店街地域での商店数、売場面積等の減少、販売額の伸び悩みは大きな問題である。

岡山駅前商店街地域が含まれる出石学区は、昭和60年に商店数355店、従業者数2,730人、販売額626億円、売場面積66,361m²であったが、平成3年には398店、2,533人、764億円、70,978m²となった。従業者数のみ減少で、商店数は増加している。同地域は表町商店街に比べ商店の街としての一体感、つまり面的な広がりに欠けているのが現状であるが、商店数の増加は商店街らしさの形成に向けた動きであるとも見ることができる。一方、増加している販売額の年平均増加率は、偶然にも内山下・深柢学区と同一の3.4%であり、停滞とはいかないまでも明らかに伸び悩み状態である。

最後に、奉還町商店街の石井学区についてみると、昭和60年の商店数513店、従業者数1,938人、販売額273億円、売場面積32,120m²が、平成3年には462店、1,679人、294億円、25,749m²となった。6年間で、商店数10%、従業者13%、売場面積20%の減少である。販売額も年平均伸び率では1.2%に止まり明らかに停滞状態にある。

岡山市を代表する3商店街がこのように伸び悩んでいるのであるが、それでは岡山市域の中でどの地区が高い伸びとなっているのであろうか。

昭和60年においてある程度の商業集積があると考えられる販売額100億円以上の学区は前述の4学区を除き12学区である。その12学区について、昭和60年、平成3年の商店数、従業者数、販売額、売場面積とその年平均伸び率を示したのが表10である。

これを見ると、販売額の高い伸びを記録しているのは西、福浜、大元、幡多の4学区である。具体的にみると、西学区は昭和60年には147億円であった販売額は平成3年には302億円となった。この間の年平均伸び率は12.8%にものぼっている。同様に、福浜学区は116億円から226億円、同11.7%、大元学区は134億円から254億円、同11.3%、幡多学

表10 岡山市の主な学区の商店数等の推移

(単位：店、人、百万円、m²、%)

| | 商 店 数 | | | 従 業 者 数 | | | 年間商品販売額 | | | 売 場 面 積 | | |
|-------|-------|-----|--------|---------|-------|--------|---------|--------|--------|---------|--------|--------|
| | 昭60 | 平 3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平 3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平 3 | 年平均伸び率 | 昭60 | 平 3 | 年平均伸び率 |
| 南 方 | 232 | 208 | ▲1.8 | 828 | 716 | ▲2.4 | 11,450 | 11,573 | 0.2 | 8,662 | 8,090 | ▲1.1 |
| 鹿 田 | 277 | 276 | ▲0.1 | 1,232 | 1,198 | ▲0.5 | 17,459 | 22,298 | 4.2 | 13,538 | 15,342 | 2.1 |
| 大 元 | 130 | 196 | 7.1 | 757 | 1,133 | 7.0 | 13,384 | 25,424 | 11.3 | 6,686 | 16,135 | 15.8 |
| 清 蟬 | 235 | 176 | ▲4.7 | 705 | 768 | 1.4 | 11,783 | 9,007 | ▲4.4 | 12,239 | 6,893 | ▲9.1 |
| 岡 南 | 194 | 217 | 1.9 | 1,473 | 1,596 | 1.3 | 27,311 | 38,828 | 6.0 | 22,042 | 27,636 | 3.8 |
| 福 浜 | 120 | 141 | 2.7 | 753 | 1,071 | 6.0 | 11,649 | 22,614 | 11.7 | 8,126 | 10,042 | 3.6 |
| 芳 泉 | 100 | 99 | ▲0.2 | 796 | 616 | ▲4.2 | 14,976 | 14,163 | ▲0.9 | 7,979 | 6,667 | ▲2.9 |
| 南 蟬 | 154 | 144 | ▲1.1 | 651 | 745 | 2.3 | 15,287 | 17,481 | 2.3 | 25,168 | 23,347 | ▲1.2 |
| 宇 野 | 96 | 108 | 2.0 | 518 | 648 | 3.8 | 11,857 | 17,297 | 6.5 | 10,383 | 12,590 | 3.3 |
| 西 | 129 | 177 | 5.4 | 765 | 1,304 | 9.3 | 14,689 | 30,212 | 12.8 | 8,635 | 10,339 | 3.0 |
| 幡 田 | 121 | 129 | 1.1 | 802 | 938 | 2.6 | 12,171 | 22,035 | 10.4 | 8,066 | 14,311 | 10.0 |
| 西 大 寺 | 315 | 267 | ▲2.7 | 1,254 | 1,242 | ▲0.2 | 21,180 | 24,996 | 2.8 | 27,871 | 29,688 | 1.1 |

資料：岡山市「岡山市の統計」

区は122億円から220億円、同10.4%であり、4学区とも2桁の伸びである。これらの地域は、表町、岡山駅前商業地域からみると郊外に位置づけられる地域で、いわゆる郊外型専門店の立地が近年著しいところである。つまり、これらの地域に代表される郊外地域の伸長により、岡山市小売業の販売額がけん引されていたのである。

VII. おわりに

岡山県小売業の構造変化についてみてきたのであるが、岡山県の中では岡山市、岡山市の中では岡山市域のウエイトが増大しており、いわゆる集中化がみられた。しかし岡山市域という狭い地域に限定すると郊外地域が伸長というか分散化傾向がハッキリうかがわれた。郊外地域の伸長は、いわゆる郊外型専門店の新規立地によりもたらされたものである。

郊外型専門店とは、幹線ロードサイドの立地が中心となっているため同じ小売商業施設ではあるものの、中心商店街とは性格を全く異にするといつても過言ではないであろう。つまり、郊外型専門店は車社会に対応し、利便性・機能性のみを追求したものであり、現状、店舗間の関連もなく“街”を形成するまでにはいたっていない。このため、“銀ブラ”に象徴されるウインドウショッピングを楽しむといったゆとり、あたたかみ、風情、さらには情報発信などが欠如しているのである。

都市の魅力という点から考えるとやはり中心商店街が成長することが必要であろう。というのは、都市において商店街の果たす役割は単なる物品販売機能を超えたものであ

り、都市の発展に直接関係すると同時に文化の形成に大きくかかわっているからである。

消費者ニーズの多様化・高度化や都市構造・交通体系の変化を主因に、従来、都市の中心であった商店街が停滞さらには衰退し、都市の中心性が喪失したり、活力が低下している事例はよくみられるところである。“まちの顔”とも言うべき商店街の成長、魅力アップを図ることは地域活性化の点からも必要である。現在伸び悩み傾向がみられる岡山市の中心商店街においてもその対策が待たれるところである。